五十崎の自然と温かいもてなしが、創作への扉を開けた。

愛媛県の五十崎和紙とコラボレーションするために、パリから一家で移り住んできたガボー・ウルヴィツキさん。媽べ1年遅く古民家に滞在し、息子2人を保育園に通わせながら、和紙の新しい可能性を探究。「自然と伝統と現代の暮らしが見事に共存している」と彼が称賛する和紙の里を訪ねた。

五十崎 和紙 五十嵐社中 ガボー・ウルヴィツキ フランス

導かれるように始まった一つの出会いの物語

山の音がする——。

「五十崎の自然を描写したガボーさんの言葉である。

山々に囲まれ、清流、小田川が中心を流れるこの地は、霧に包まれることも多く、昔話の絵本のような幻想的な風景が広がる。

古来、紙すきの盛んな土地であったが、現在、残っている工場はわずか2軒。そこで2006年、中小企業庁を中心とした「JAPAN BRAND」育成支援事業の助成を受け、パリのインテリア見本市に出展し、以前から和紙に興味があったガボーさんと出会ったのである。

彼がやって来たのは08年の夏。最初は「お母からのスタートでした」と五十崎社中代表の齋藤宏之さんは話す。

「和紙を使った壁紙を作ろうとしても設備がない。地元の紙工所の協力を得て、和紙を乾かしながらローラーで巻いていく機械を造るところから始まりました」

まさに地元を巻き込んでの一大プロジェクト。町の人もガボーさん一家を歓迎した。ベジタリアンの彼らのために精進料理を作ったり、近所の農家が野菜を差し入れたり……。その温かいもてなしは、彼の創作活動に大きな影響を与えたようだ。

和紙にギルディング加工を施すガボーさんと職人

リズミカルに紙をすく山本さん。朝の役目をする「おはなはん」の語り気が始まるいちばんいい紙ができるという

町の皆さんに温かく迎えられたガボーさん

和紙の上で融合した日本とパリのエスプリ

小田川のほとりにある「天神窯紙」を訪れると、しんとした工場に、紙をすく音だけが響く。

「気温や湿度によって、材料の配合も、紙をすく回数やリズムも変わってきます。毎日が1年生です」と話す山本咲子さんは、35歳40年の80歳。小さな体が、紙をすいている時は大きく見える。

ガボーさんがまず挑戦したのが、「透かし手法」。すきたての和紙に水をかけると、その部分だけ薄くなるのを利用して、繊維を描く技法だ。納得のいく模様が浮かび上がるまで、紙の厚さや水圧を調整し、多い時には1日に100回以上も試行錯誤を繰り返した。その度に、山本さんは彼の求める厚さに紙をすき分けたのだ。

「最初は何ができるんやろうと不思議でしたが、型を外すと着物の柄みたいなきれいな模様が現れて、驚きました」(山本さん)

言葉の壁はあっても、和紙に対する思いは同じだ。ガボーさんも、「和紙は生き物。自然の素材だから、その日の天候によって変わる。まずはそれを体で感じることが大切」と話す。

次に試みたのは、ギルディングという金属箔で模様を施す技法との融合。手すき和紙の柔らかな風合いと、見る角度によってさまざまに表情を変える金属箔が互いを引き立てあい、華麗な気品を感じさせるこの作品は、日本とパリのエスプリの出合いを象徴している。雪の結晶や樹木など、彼がこの地で感じ取ったモチーフもあり、マカオのホテルから壁紙の依頼も来ているという。

「和紙という素材、五十崎の自然と人とは、新しい創作への扉をいつも開けてくれました。今後もさらなる実験を一緒にしていきたい」(ガボーさん)

「透かし手法による「透かし和紙 ミュス」

光の加減によって表情を変える「ギルディング和紙」。ブックカバーやポストカード、コースターなども展開予定※価格未定

ガボーさんのアイデアで、和紙を使ったファッションショーも開催

空間をエレガントに演出するギルディング和紙の壁紙

「Washi」というブランド名は、「Japon(日本)」、「Gustation(=塩やし)」、「Nature(=自然)」というフランス語の頭文字と、「職人じや」な」という語感と狩持を感じさせる五十崎の方言を重ねて付けられた。和紙の魅力を世界に発信していくために出合った五十崎とガボーさんは、これからどんな物語を紡いでゆくのか楽しみである。

和紙デザイナー
ガボー・ウルヴィツキさん
1968年、ハンガリー生まれ、パリ在住。商業のデザイン「ULOAD」(ウレド)、2007年、フランス国家資産企業の認定を受ける。08年8月～09年1月、09年7月～10月、五十崎に滞在。

五十崎社中 代表
齋藤宏之さん
1972年、神奈川県生まれ。慶応系IT企業に13年間勤務後、妻の実家である五十崎の和紙復活のために移住し、2008年7月、株式会社五十崎社中設立。すき和紙を使った製品の製造・販売を行う。

問 五十崎社中 TEL.0893-44-4403 www.ikazaki.jp

ランキング川柳 花よりも 団子よりまだ 者がいい(石井春男・83歳) まだまだ活がいいに決まっとる。 「まだ」という2文字が妙に気になりますが……。